



ジョージア(グルジア)便り その75

着

物の裾からちらりと出された白い足袋を履いた足はそれがあたたかも一人の人間のよう

に、お辞儀をしながら一歩前へ出される。丁寧な閉じられた手のひらをくると返すと、周りの空気まで一緒に動かしているのがわかり、少しばかり伏せられた目は鋭いようで柔らかに観るものを惹きつける。その所作は70を過ぎたとは到底思えず、舞台の上には妖艶な娘がいるとしか思えなかった。

僕は今回初めて生の坂東玉三郎の踊りを観たのだが、間の使い方、目の置き所、緩急、指先足先まで行き届いた神経とそこからさらに発せられる舞台の空気の動かし方、今まで観てきたどんなバレエダンサーよりも心に響いた。ああ、僕は今まで何をやってきたのだろう、これこそが芸の道を究めた者の姿である。とすっかり感服してしまっ

とは感じてはいなかった。僕は身長にある程度恵まれよく「日本人離れした」なんて形容詞をいたされた。だが日本人離れしているが、結局のところ西欧人ではなく、本物のエリートたちのプロポーシオンにはかなわない。幼いころから肉を食べ、生まれ持った文化的背景が異なる彼らとは根本的に違うのだ。いくらうまくまねようとしてもそれはコピーに過ぎず、コピーはいつまでもたつても本物を超えない。

そんな中で日本が伝統的に持つてきた芸事の道というものは、僕にはとても新鮮で、なおかつこれから自分が追究し武器にしていかななくてはならないものであると玉三郎の腰裁きを見て実感した。

日本人は白黒はつきりつけないところがある。国際的競争社会の中でそれは悪しき習慣だと非難されてきたが、芸事にとつてはそうでもないのではないか。曖昧であるからこそ含みを持たせることができるし、そのなかで磨かれた美的感覚というものがある。日本の修業制度など一見非合理的に見えてしまう。文楽において人形遣いは足捌きに10年、左手に10年かけてやっと面使いになれる。大夫が一人前として認められるのは酸いも甘いも様々な人生経験をし60の声音になってからだ。だが曖昧で言葉に換えられないところに

こそ芸の極みはあって、それはただ踊りの技術ができるようになったからだとか、肉体的に向上しただけでは身に付かないのだ。

正直に言つて日本の伝統芸能が培ってきた精神性や、奥深さに比べるとバレエは残念ながら体操のように思えてくる。もちろん幾人かの天才はバレエにおいてもそういった自分の世界観をつくり出していったのだが、全体が向かっている方向は決して深遠なものがあるとは思えない。そこに日本の「兄さん」たちが江戸時代、いや世阿弥らが活躍した室町時代から切り開いてきた芸道の哲学をバレエへ取り入れ、風穴を開けるのが日本人である僕の役目なのではないだろうか。

歌舞伎役者はバレエの達人だった？

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

